

21世紀に向けての看護教育

ジョイス S. 津野田

Roles of Higher Education with Special Reference to Nursing Education in the 21st Century

Joyce S. TSUNODA*

概 要

我々は、ジョイス・S・津野田博士をお招きして、“21世紀に於ける高等教育殊に看護教育の役割”と題して学生、教員に特別講義をしていただいた。先生はハワイ大学副学長、ハワイ州立全短期大学総長であり、米国のコミュニティ・カレッジ(短期大学)と日本の短期大学間の学術交流に著明な業績を達成されています。この度、日本公立短期大学協会総会に出席のため遠路ハワイから松江に来られました。この機会を利用して、本学を視察いただいて特別講演をお願いしたところ快くお引き受けいただきました。客員教授としてお迎えすることが出来ました。日米の高等教育の果たすべき役割、大学生として大きい夢を持つべきことなど示唆に富むお話を聞くことが出来ました。

(概要の文責 恒松徳五郎)

キーワード：21世紀の高等教育，看護教育学術交流，特別講演，大学生の夢

アローハ。

温かくお迎えくださいまして、ありがとうございます。今日、こうして皆様の前でお話するようお招きいただきまして光栄に存じます。島根県立看護短期大学長、恒松先生に厚くお礼申し上げます。また、澄田島根県知事より、平成14年3月31日までの期間、県立看護短期大学客員教授を委嘱され非常に誇りに思います。心から感謝申し上げる次第です。

本日のスピーチは、「21世紀に向けての看護教育」をテーマとしてお話しさせていただきます。

あらかじめお許しいただきたいのですが、私の日本語は上手ではありません。私は10才でハ

ワイに渡り、アメリカ人として育ち、教育を受け、ほとんど英語だけで50年近く過ごしてきました。本日のように、日本語でスピーチをするのは容易ではありません。そのことを大目に見ていただきたいと思います。

そこで、まず、私は2つの問題点を挙げることにしました。1つは“日本と米国における高等教育の役割とは何か”，もう1つは“日本と米国における看護教育の特別の役割とは何か”です。

文部省高等教育局が平成11年1月に出した報告書(21世紀の大学像と今後の改革方策について—競争的環境の中で個性が輝く大学—(答申要旨)大学審議会 p 3~4)によると次のように書かれております。

“21世紀は大学が社会をリードする時代です”。

*島根県立看護短期大学客員教授，ハワイ大学副学長，
ハワイ州立全短期大学総長

“来るべき21世紀は、多様で新しい価値観や文明観を示すことが、強く求められる時代です。このため大学では、より幅の広い視点から「知」の再構築を行い、その知的活動によって社会をリードし、社会の多様な要請や期待などに適切に答えながら、その発展を支えていくことが求められます”。

“自立性を求め、個性を輝かす”これが大学(高等教育)としての一番大事な役割ではないでしょうか。

私は、これらの文章を読んで、大変良い言葉で書かれていると思いました。これらの言葉に日本と米国における高等教育の基礎的な役割を見出すことができると思います。しかし、これらのことは実際にどの程度、日本と米国の大学で施行されているかということです。

私は恒松学長から送っていただいた鳥根県立看護短期大学のカタログを興味深く拝見しました。表紙に出ている文字が私の目をとらえました。「にんげん大好き」と書いてあります。そうです。学問的、技術的なものよりも、大切なことは教育が人間愛を育てあげることなのです。私は、鳥根県立看護短期大学の建学の理念にまったく同感しました。

“優しい手と、温かな心で人を愛する、これこそが看護職者にとって一番大切なものと考えています”

小児科と小児教育の権威である内藤寿七郎先生が「育児の原理」という本をお書きになりました。“「育児の原理」・・・温かい心を育てる”，“今、人と地球には、温かい心が最も必要です。そして人間の幸せの原点はその人自身が温かい心を持つことです”と内藤先生はおっしゃいました。去年の6月、私は、ハワイにいらっしゃった内藤先生にお会いすることができました。97歳になられた内藤先生の手を握って私は心の中で祈りました。「先生、どうもありがとう。先生の温かい心を私にも分けてください。」私は、温かい心で教育者としての役割を続けて行きたいとつくづく思いました。

“優しい手と、温かな心”鳥根県立看護短期大学の建学の理念にあるキーワードと、内藤先生の教えは同じですね。“優しい手と、温かな

心”を持つ看護職者を育てる、このことが看護教育として学問以上に大切な役割ではないでしょうか。

続いて、大学教育の役割として、もう1つ大切なことがあります。米国では、このことをresponsibility and civilityと申しまして公民としての責任と礼節という意味です。最近、米国では公民あるいは市民としての責任感の欠如が問題となっております。ことに若者の間では政治・社会的に無関心になり、無気力というか、米国と日本はその点で共通しているようです。

私たちは、日本又は米国の自由社会に住む幸運に恵まれているにもかかわらず、多数の人がその社会の中に入って行こうとせず、人と人との触れ合いも少なくなりつつあります。選挙の投票率も低いようで、政治への不信感もありますが、社会に対して何かをなそうとする意欲というものに欠けているようです。

最も怖いと思うのはこの無関心のようなものが、突然にして暴力に変わることです。コロラド州のコロンバイン高校射殺事件、神戸の少年による殺人など数少なくありません。

私たちはこういう事件が続いて起こっているのを許すことはできません。専門的な知識や高度な技術を持った世代をつくりあげても、その世代の人々が知識や技術を社会のためにいかに有効に使うかについて関心を持たず無気力であったなら、この現在の悪い傾向を断ち切ることはできません。

学生に社会的責任感を植え付け、お互いに信頼して助け合っていく精神を養うこと、これは大学当事者の大きな責任だと思います。米国では、すでに多数の大学で、この責任への取り組みを始めています。その1つの方法はサービス・ラーニングというものです。

サービス・ラーニングというのは、教室と社会をつないで行う教育法です。学生を校外に出して地域社会のために、学校で習っている知識を生かしたボランティア活動をさせるのです。サービス・ラーニングは、単なるコミュニティ・サービスではなくて、よく考えてつくられた訓練カリキュラムであり、教員たちの指導の下で行われます。サービス・ラーニングは、また、

学生と教員たちが地域社会のいろいろな団体とパートナー・シップを組んで行う場合もあります。サービス・ラーニングは社会的責任に重点をおき、学生たちに一般社会での役割などを理解させようとしています。

サービス・ラーニングの目的は、島根県立看護短期大学の建学の第2の理念に似ています。「専門的な知識・技術を備えているだけでなく、変化する社会の現状と、将来を見つめることができる広い視野を持つ必要があります。」今日、私は、カピオラニ短期大学の2人の教授の書いたものを、日本語に訳したものを持ってきました。タイトルは“Moving Forward to Care For Hawaii” というものです。これにサービス・ラーニングとは何かということが詳しく説明されているので読んでいただきたいと思います。

ハワイ大学機構は、アメリカ全土でもユニークな存在であることを指摘しておきたいと思えます。なぜユニークかといいますと総合大学(マノア校)、学士号授与大学(ヒロ校)、2年制短期大学、この3つが、統合されて1つの大学機構を形作っているからです。

看護教育は、コミュニティ・カレッジ4校(カピオラニ、カウアイ、マウイ、ハワイ)と、マノア校、ヒロ校で行っています。ご存じかと思いますが、2年制のコミュニティ・カレッジ(短期大学)では、準学士号、Associate Degree Nursing (ADN)と技術専門課程修了証書を授与しています。ヒロ校では学士号、Baccalaureate in Nursing (BSN)を取得できます。そして、マノア校に限ってはBSNのほかに理学修士号(MSN)と博士号(Ph.D. in Nursing)を取得することができます。

ハワイのコミュニティ・カレッジを終了した学生は4年制大学であるマノア校に編入して3年次からの教育を続けて卒業し、さらに、看護学の博士号まで取得することも可能となっております。このようにコミュニティ・カレッジの単位がそのまま4年生の大学に編入する際に使えるということが一番の特徴かと思えます。

私はコミュニティ・カレッジを大変誇りに思っております。それは、2年制の短期大学の枠を超えたものです。コミュニティ・カレッジはその名のとおりにコミュニティすなわち地域社会の

カレッジであり、人口の集中している地域にあります。4年制の単科大学や総合大学よりも安い授業料で受講することができます。最も重要なのはコミュニティ・カレッジが根本としている考え方、すなわち、「だれもが同じ能力を持っているわけではない。しかし、だれもが皆、自分の持つ能力を最大限に伸ばす権利を持っている。」この根本にもとづいて運営されていることです。教育における平等の概念はもっと広く行き渡り、21世紀の高等教育の土台とされなければなりません。

看護教育にとっても、21世紀の看護職者は自分の担当する患者さんに対して最良のケアを提供する方向へと変わってきていると聞いております。一人一人の看護職者が管理責任を担うことが必要とされてきています。21世紀の看護職者は必要なことをはっきり主張することができて、チームとしての責任感を持つことを要求されています。より柔軟な考え方や進んでよい方向に変わって行こうとする姿勢も持たねばなりません。問題解決能力やコミュニケーション能力、いかにリーダーシップを発揮するか、そういった力を伸ばすことに看護教育の重点がおかれるようになります。

技術の発達は看護の実際の場合にも、看護教育にも影響してくるでしょう。とはいえ、看護は人に焦点をしばった職業です。ハイ・テクはハイ・タッチの代わりにはなれません。つまり、人の手の温かさと気配りにはかなわないのです。技術は道具です。技術は適切な配慮のもとに、また、患者さんとの触れ合いの時間をもっと持つように看護職者の負担を軽くする目的で使われるべきです。

生涯教育は看護職者にとって仕事のためにも、1人の人間として充実した人生を送るためにもその生活の一部となるでしょう。看護職者の皆さんの仕事の上での進歩・向上のため、あるいは自分自身の成長ため、短大でも総合大学でもいろいろなコースを提供しなければなりません。それらのコースはさまざまな分野にわたって、単位を取るためだけでなく、内容豊かな良い短期コースである必要があります。

生涯教育、これはアメリカの高等教育で急成

長を遂げつつある分野です。1997年には7,600万人の成人が1つ又はそれ以上の学習活動に参加しています。この数はアメリカ成人人口の40パーセント以上になります。

高等教育は、学生たちに確信を持って生きることや、ますます国際化してゆく社会に生産的に貢献するための準備を整える手助けとなるべきだと考えております。私たちを取り巻く世界は急速に地球村となってきています。

グローバル・シティズン、国際人になるとはどういうことでしょうか。私はいつも学生たちにこう言っています。国際人になるということは、自分自身の国、つまり、自分自身の文化・歴史・芸術・政治・経済・ライフスタイル、それらについてまず知識を深め、感謝の気持ちを持たなくてはならないということです。日本の学生さんたちに、「国際人とは礼儀正しい日本人である」と申し上げたいのです。

最後に、学生の方たちに向けて私個人の人生と教育というものが、私自身と私の娘たちにどれほど重要な意味を持っていたかをお話ししましょう。

皆さん、今日、今この時に、ご自分自身を見つめてみてください。今日、ご自分のイメージはどんなものですか。そのイメージをつかんで未来に向かって、力をこめて投げてください、とあえて申し上げます。これは私から皆さんにお伝えしたい、大変重要なメッセージなのでもう少し説明しましょう。

皆さん、今の自分自身の姿を見てください。今、自分でも知らずに、混沌として疼きつつ、膨れ上がってきた自己イメージ、つかみ難いようなそのイメージ、しかし、何か心のそこに、これが自分だという手応えがあるはずです。さて、その自己イメージをはるか前方へ、明日に向かって投げかけてみませんか？

「自分のイメージ……自分の夢を明日に向かって、高く、広く投げる……」(この言葉は、私の尊敬している、教育者でいらっしゃる先生が、いつかおっしゃった言葉です。私の人生はこの先生から大きな影響を受けています。)

私は、大阪に近い兵庫県の尼崎で生まれまし

た。父は、かつて有名な野球選手で阪神タイガースのピッチャーでした。名前は西村幸生と申しまして日本野球殿堂の中におります。でも、父が亡くなったとき私はわずか7才でした。私が初めてハワイにまいりましたときは、横浜を発って太平洋を渡りホノルルに着くまで7日かかりました。今では関西空港からホノルルまで飛行時間はわずか7時間です。

多くの皆さんと同じように、私は日本人の女の子として育ち英語はまったく話せませんでした。ですから、ハワイの生活に適應するには、相当に悪戦苦闘して英語を習わねばなりませんでした。けれども皆さんと同じように良い先生に巡り会い、教えていただきました。また、私を受け入れてくれ助けてくれる友人たちがいました。

今日では、私はアメリカ市民であり、そのことに誇りを持っています。しかし私は日本人としてのルーツと伝統を受け継いでいることにも誇りを持っています。

ハワイで、初めてアメリカの高校の卒業式を経験したとき、今きっと皆さんが感じていらっしゃるのと同じことを私は感じておりました。私はだれ？ 私自身のイメージはどんなものなのだろう？ どんな未来が私を待っているのだろうか？ 何の答えも見出せませんでした。でも、そのときの自分よりも、もっと違う自分になりたいと望んでいました。もっと何かをしたい、もっと学びたい、もっと自分を表現したい、……私は成長したい、向上したい、何かをなしとげたい、人生の境界を広げたいと望んでいたのです。振り返って考えてみると、そのとき、私は自分自身を、自己イメージを、前方に向かって出来る限り、遠く、高く、大きく投げたのでした。

そして40年後の今、私はあのか、未来に向かって投げたボールを受け止める用意ができています。今、私の手の中にあるのは大変、充実した人生です。私はハワイ大学で勉強し化学を学び、生化学で博士号を取りました。自分の勉強してきたことが役に立って、化学を教えることができました。後に、ハワイ大学の管理者となり、リーワード・コミュニティ・カレッジと

いう新しいカレッジを開設する機会に恵まれました。その後、カピオラニ・コミュニティ・カレッジの新しいキャンパスを建設しました。さらに、ハワイ州全体におよぶ、コミュニティ・カレッジのシステムを発展させ、ハワイ大学の強力かつ重要な一部となるに至っております。

現在では、アメリカ国内のみならず、アジア太平洋地域全体を通じて教育に関してお話をする機会を数多くいただいております。

私はまた、自分を育て教育してくれた家族を誇りに思っております。38年前に結婚した夫は私に大変協力的です。夫も日本からハワイに勉強に来た人です。私共には誇りにしている娘が2人おります。どちらも、アメリカ人女性として成長しましたが、日本の文化を受け継いでいることに感謝しています。上の娘は、留学生として日本へ来る道を選び、早稲田大学国際研究プログラムで苦勞して日本語をマスターしました。その後、上智大学の比較文化学科で比較文学を専攻し、学士号を取得しました。現在は整形外科医と結婚し日本に住んでおります。良き主婦であり3人の子供の母親です。日本人として育てている孫たちは埼玉県公立の公立学校に通っています。そして、孫たちは日本語と英語の両方を生活の中でごく自然に使いながら育てております。下の娘は、アメリカ国内で最も良い教育を受ける道を選びました。自分の努力で、ハーバード大学の4年間の奨学金を得て、後にエ

ール大学に進み修士号を取得しました。その後、ハワイにもどってハワイ大学のがん研究センターで働きながら去年6月にハワイ大学で博士号を取得しました。結婚して2人の小さな子供がおります。

娘たちの話をしましたのは、母親として自分の娘たちを誇りにしているからだけではありません。「自分がなりたいと望むものになれる」という可能性を皆さんと分かち合いたいからなのです。あなたは自己イメージという人生のボールを、あなたが望むだけ、遠く、高く、広く、投げることができるのです。皆さん、大胆に、大きな望みを抱きましょう。自分が実現しようと選んだものがあなたの人生なのです。

その投げたボールをしっかりと受け止めるためには、あなたは喜んで懸命に仕事にはげむにちがひありません。

毎日、毎月、毎年、フルに生きることが大切です。

皆さんの前には輝かしい未来が開けています。自分の人生をどうするかは自分の手の中にあるのです。何をしても自分に誇りを持ってください。日本人であることの誇りを胸に前向きに力強く歩んで行ってください。

日本人としての誇りを持ち、自分が投げる明日の大いなる自己イメージに向かって、まっしぐらにつき進んでお行きなさい。

ご静聴、ありがとうございました。

Summary

Shimane Nursing College invited Dr. Joyce S. Tsunoda to give our students and faculty members a special lecture entitled "Roles of Higher Education with Special Reference to Nursing Education in the 21st Century". She is Senior Vice President, University of Hawaii and Chancellor for Community Colleges. Dr. Tsunoda contributed for many years to the promotion of academic exchanges between colleges in the United States and Japan. She came all the way from Hawaii to attend the Meeting of Association of Japanese Public Colleges held in Matsue, Shimane Prefecture. We were very happy that she accepted our invitation to visit our college and gave us a special lecture as the visiting professor on May 31, 2000.

The responsibility for the wording of this summary lies with Dr. T. Tsunematsu